

かごしまの昔話

もの言う亀



ある年の師走、正月がくる
というのに、もちをつくこと
もできず、年取り料理の豚骨
もないというありさまでし
た。弟は「何もない正月だね。

の金をやるぞ」と兄が言った
ので、弟は亀を持ってきました。
その亀が「親ん子んヒイヒ
イ」と言いました。兄は驚き、
ます一升の金と竹ザル一杯の
米をくれました。

元日の朝、兄はその亀を借
りていきました。兄は隣り村
に行き、そこの金持ちと賭け
をしたのです。亀がものを言
つたら、兄の勝ちで隣り村の
金持ちの財産の半分をもら
う、亀が何も言わなかつたら、
向こうの勝ちで兄の財産を半

なかつたので、弟が親の面倒
をみていました。弟は一生懸
命働いていましたが、いつも
貧乏でした。

ある年の師走、正月がくる
というのに、もちをつくこと
もできず、年取り料理の豚骨
もないというありさまでし
た。弟は「何もない正月だね。

貝でも採つてくるよ」と浜に
行きました。浜を歩いて貝を
探していると、「親ん子んヒイ
ヒイ」という声がします。それ
は小さい亀でした。弟がそれ
を持って帰り、親に見せると、
亀はすぐに、「親ん子んヒイヒ
イ」と言いました。親たちが
「泣いておる」と哀れがつたの
で、ここには長くおけないと
思い、兄の家に行きました。

「もの言う亀を拾つてきた
よ」と言うと、「もの言う亀？
本当かよ。本当ならます一升

むかしばなし

兄と弟がおりました。兄は早く
に嫁をもらって分家し、た
いそう金持ちでした。しかし、た
親の暮らしを助けようとはし
なかつたので、弟が親の面倒

をみていました。弟は一生懸
命働いていましたが、いつも
貧乏でした。

ところが亀は一言も言わな
かつたのです。結局、財産の半
分を失つた兄は怒つて、亀を
高下駄で踏み殺してしまいま
した。これを知つた弟は泣い
て悲しみ、そのなきがらを埋
め墓をたててやりました。

それから、兄はなぜか貧乏
になつて、正月になつて
も、もちもつけない暮らしに
なりました。一方、弟は金持
になつて、親と楽しく暮らし
たということです。



(原話『久永ナオマツ 姫の昔話』)

文／有馬英子 絵／二石綱夫